アカシア探検隊

甲：おい。今回は39回の長沼先輩にインタビューじゃ。

乙：えっ。あの日本サッカー協会名誉会長の長沼先輩ですか。この方は非常にお忙しいから、今度こそ東京出張ですよね。

甲：いんにゃ。今度広島にパーティーで帰ってこられるからそんとき。

乙：ほんじゃあ、パーティーの前にホテルのロビーかどっかで？

甲：前後スケジュールびっちりらしいけぇパーティー中にインタビューじゃ。図々しいおまえなら大丈夫。会費もそう高こうないらしいけぇ出しといて。

乙：ワシぁホンマに先輩にかわいがってもらえるわい。

ということで、今回は39回長沼健先輩の登場です。

長沼先輩は高校時代に全国大会、国体で優勝。関西学院、中央大学、古河電工でも選手、監督としてご活躍されました。また東京、メキシコオリンピックの日本代表監督、東海大学教授、日本サッカー協会役員、会長として戦後のサッカー及びスポーツ界に多大な貢献をされた事はここに記すまでもなく、皆さんよくご存知の事と思います。その長年のご功績をねぎらう会に、さもサッカー関係者のような顔をして紛れ込み、ゲリラ的インタビューを敢行いたしました。

乙：Jリーグ誕生から念願のワールドカップ召致、そして出場と日本サッカー大発展の時期に大変な重責を担われたわけですが。

長：私一人でやったんじゃないし、また出来る訳もない。まあ一言でいえば『周りの人たちに恵まれた』ということですよ。夢を描いてそれに向かっていく時は皆の力が結集できないとうまくいかんでしょ。それが出来たということですよ。まさにチームワークです。それに広島出身の関係者も多かったのにも助けられました。広島が強い時は日本代表も強かったんですよ。あのクラマーコーチが最初におぼえた日本語が「ほいじゃけんのう」じゃけぇ。それだけ広島のもんが多かったとゆうことですよ。

乙：とはいえいろいろご苦労も多かったと思いますが。

長：何かを成し遂げようとする時はそれはつきものだから。それもやっぱり皆さんが支えてくれたから。そんなに苦労したとは思いません。好きなサッカーの事だし。振り返って見ると、むしろ充実してそれが楽しかったといえるかもしれんねえ。

乙：長い間選手、監督、役員として日本サッカー発展に貢献してこられたわけですが、一番の思い出というとやはりワールドカップ関係の事でしょうか。

長：うんそれもあるけど、それよりもっと嬉しかった事があるんよ。

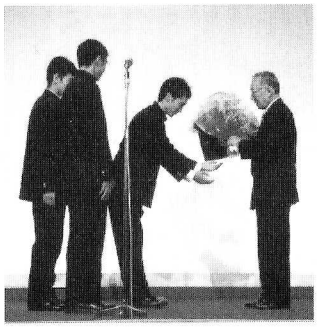
乙：といいますと。

長：ちょっと地味な話で申し訳ないがJビレッジ（サッカー村）が出来た時なんですよ。ありゃあ感激したねぇ。一つの大きなスポーツインフラともいえるものが出来たわけで、日本じゃあまずできんと思っとったから。

サッカーのみならずスポーツ全般が国民にとってもっともっと身近になって行くことは本当に大切な事なんです。その為にはヨーロッパ並のスポーツ施設が絶対に必要で、それに近づく第一歩な訳ですよ。同様な施設が、これから全国にたくさんできるように願っています。

乙：ワールドカップ召致、出場に関してのお話も聞きたいのですが。

長：召致に関しては、日韓共同開催と決まった当初いろいろ言われたけど、今は本当によかったと思ってます。歴史的に様々な事があった両国が一つの大きなイベントを成功させるべく協力して行く事は大きな意味を持つと思います。



サッカーというスポーツが国家間の友好と親善に大きな役割を担ってくれると思います。

出場に関しては、当然、嬉しくて感激しました。Jリーグを発足させ、それによって日本サッカーを世界レベルに押し上げるという目標が結果となって現われた訳ですから。でもこれは我々が目指していることの第一歩。あくまでも頂点に立つことが最終目標ですから。エベレスト登山に例えるなら、カトマンズよりちょっと先にベースキャンプが出来たようなもんです。今までは全然およびでなかったけど。

乙：附属時代の思い出をお聞かせください。

長：サッカー部監督の多々（信二32回）さんとの出会いが自分の人生を決めたと言えるかもしれません。この方は非常に素晴らしい監督で、今から考えてもとってもモダンなサッカーを目指された監督でした。それにサッカー部自体もモダンな雰囲気で、あの体罰同然の野蛮な時代に一切そういう事がなかったし、逆に校内でそんな事に会いそうになったら庇ってくれたりしてました。トレーニングはそのかわりハードじゃったけどね。だから私も指導者の立場になって、選手には一度たりと手をあげんかった。殴って選手が上手くなるんなら、世界中でやってるはずですよ。

乙：最後に現役諸君にメッセージをお願いします。

長：夢を描いて、それに近づく努力を忘らないで欲しい。あきらめた時点で夢で終わってしまう。あきらめさえしなければ、実現可能なんですから。それと仲間を大切にして欲しい。仲間は試合で勝つことよりもっと大きな財産を与えてくれます。このことは自分のサッカー人生の原点が附属時代にあった事を考えても明らかです。

乙：今日はお忙しいところをありがとうございました。

甲斐　稔（63回）
谷口公啓（73回）